

ソ連参戦――満州へ攻め込む

平成23年10月1日 高根台公民館

昭和二十年八月十五日の正午、あの「終戦」の玉音放送を聞いた時、國民はみんな「ああ、負けたんだ。これで戦争は終わつたんだ」。そう思つたのでは、ないでしようか。朝からジリジリするほど暑い日で、ラジオは繰り返し「正午の玉音放送」を予告していました。六日の広島への原爆、九日にはソ連が日ソ中立条約を破つて満州へ一斉に攻め込んで来ましたし、長崎にも原爆が投下されました。國民は、戦争がもうどうにもならなくなつていることは、肌で感じていましたが、それでも多くの人は「本土決戦、一億玉砕」を叫ぶ軍部の掛け声のままに、「まだまだ戦うんだ」と。中学三年生だった私なんかも、この日本の歴史上初めての天皇の放送は、「國民に最後の奮起を促すためだ」と思つっていました。

今でも六十六年前の全てが真っ白になつたような思いを、昨日のことのようによく覚えております。私は勤労動員先の軍需工場で放送を聞いたのですが、正午の時報の後、和田信賢アナウンサーが「ただいまより重大なる放送があります。全国聴取者の皆様、ご起立願います」。続いて「君が代」が流れ、内閣情報局総裁下村宏が「天皇陛下におかせられましては、全國民に対し、かしこもおんみずから大詔を宣らせたもうことになりました。これより、謹みて玉音をお送りします」。そして、戦争終結を告げる昭和天皇の声が、静かに抑揚を伴つて流れ出しました。雑音まじりで聞き取りにくい放送でしたが、「朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ」。これだけははつきり聞いて、「ボツダム宣言」を受諾したということは降伏したことなんだ。私はそう思いましたし、誰もが戦争終結の決定的な一瞬だと受け止めたはずでした。ところが、実際は、この日で戦争は終わつてはいなかつたのです。日本としては、米英、中国、ソ連に対して同時に降伏した積もりでしたが、ソ連だけはその後も攻撃を続けたのです。千島列島最北端の占守島に、ソ連軍が砲撃と共に上陸して来たのは十八日の早朝でした。そして現在、ロシアとの間に領有権問題が続いている北方四島、これらの島々がソ連軍の手に落ちたのは、終戦から十三日も経つた二十八日からのことなのです。ソ連軍はこの日、択捉島に上陸すると、九月一日に国後島、色丹島に進出し、歯舞諸島の占領を終えたのは實に五日のことでした。九月二日には東京湾の戦艦ミズーリ号艦上で降伏文書の調印式が行なわれ、ソ連軍代表も署名しているのですから、太平洋戦争は公式にはこれで終止符が打たれたはずでした。しかし、ソ連はその後も軍事行動を続けていたのです。

八月九日、終戦わずか六日前というソ連の駆け込み参戦で、戦闘による死者は満州六万、樺太・千島で五千、計六万五千人と言われています。ところが停戦後の死者は、厚生省の資料によると満州で十八万五千、北朝鮮二万八千、樺太・千島一万、ソ連本土では五万五千と、二十七万八千人にものぼっているのです。満州、北朝鮮の死者はほとんどが民間人で、中でも国境地帯に入植していた開拓団は、二十七万の開拓民のうち八万人近い犠牲者を出しています。ソ連軍の猛攻の中を逃げ惑い、飢えと寒さの逃避行に倒れていったのですが、ソ連本土の死者五万五千人こそは、まさに非道としか言い様のない、シベリアの長期抑留によるものでした。

スター・リンは八月二十三日、「極東、シベリアでの労働に、肉体的に耐えられる日本軍捕虜五十万人を選抜せよ」。こういう極秘指令を出し、五十七万五千人が、シベリアなどソ連全土に点在した千二百か所の収容所に送られ、極寒の中での苛酷な労働を強いられたのです。最長で十一年にも及んだ最後の抑留者一千二十五人が舞鶴に帰国つて来たのは、昭和三十一年十二月二十六日、経済企画庁が経済白書で「もはや戦後ではない」と宣言し、日本は高度経済成長に向けて走り出している時でした。無事にソ連から引き揚げることが出来たのは、四十七万二千九百人。この他、満州や北朝鮮に帰された人が四万三千人いたと言いますから、数字的には大体合うのですが、抑留団体やロシア研究者の間には、抑留中の死者は六万二千人から九万二千人に達する、との見方もあります。

ソ連は平成二年四月、死亡者名簿や遺骨の引き渡し協定に調印しましたし、五年十月に来日した当時のロシア大統領エリツィンも、シベリア抑留を「全体主義の犯罪だ」と謝罪しました。しかし、シベリアの凍土に眠っている遺骨収集は遅々として進んでいないのです。五年前、平成十八年八月の読売新聞投書欄に「シベリアで死亡 祖父の遺骨戻る」という、三十七歳の札幌市の主婦の投書が載っていました。祖父と同じ部隊にいて生還した人たちが、「異国で無念の死を遂げた仲間を、ふるさとへ帰してやるのは自分たちの使命だ」と遺骨収集に当たり、DNA鑑定で祖父の遺骨と確認されたんだそうです。名前だけ刻まれて、遺骨のないお墓に六十年以上も手を合わせ続けてきた祖母とお母さんは、「泣いたり笑つたりしながら、祖父の遺骨に話し掛けています」と書いてありました。「せめて遺骨だけでも！」。そう思っている遺族は、まだまだ大勢いますし、その人たちにとつては、戦争はまだ終わっていないのです。

ソ連軍の満州進攻が始まったのは、断続的に雨の降りしきる八月九日午前零時過ぎでした。満ソ国境のほぼ全線にわたり、戦車を先頭に攻撃して來たのです。極東軍総司令官ワシリエフスキイ元帥が指揮する八十個師団、約百七十四万人。大砲、迫撃砲三万門、戦車、自走砲五千二百五十台、飛行機五千百七十機の大部隊です。迎え撃つ関東軍は二十四個師団、約七十万人。火砲千門、戦車と飛行機が

それぞれ二百程度。数の上では大きな戦力の開きでしたが、満州の日本人はみんな、「精銳関東軍さえいれば…」と思つていたのです。満州のラジオ放送も、朝から「今朝、ソ連軍は卑怯にも突如として満州国を攻撃して参りました。ソ連は日ソ中立条約を一方的に蹂躪し、不法にも全国境から侵入を開始しました。しかし、我に關東軍の精銳百万あり。全軍の士氣はきわめて旺盛、目下前線では激戦を展開、ソ連軍を撃退中であります。國民はわが關東軍を信頼して、すべてを軍へ、前線へ…」。こう繰り返し放送していましたが、その頼みとする關東軍は、數こそ一応は揃えてはいても、「張り子の虎」に過ぎなかつたのです。

戦局の悪化と共に、昭和十九年から精銳部隊の南方転出が始まりました。十一个師団が引き抜かれ、二十年に入ると、今度は本土決戦用に四個師団と軍需資材の三分の一が内地へ、二個師団を南朝鮮に持つて行かれたのです。一方のソ連は四月五日、日ソ中立条約が満期となる二十一年四月以降は延長しないと通告してから、極東に続々と大軍を送つて来ていました。五月に中国戦線から四個師団の満州転用を決めましたが、とても足りません。關東軍は七月十日、満州の居留民で兵役年齢に該当する二十五万人の、「根こそぎ動員」を実施したのです。開拓団などは男手をみんなとられて、残つたのは老人と女、子供だけ。これがソ連軍の攻撃、現地民の襲撃から守つてくれる者もなく、掠奪、暴行、さらには集団自決の悲劇を生む結果になりました。

しかも關東軍の方は、「砲兵連隊」と称しながら、大砲が一門もない部隊もありましたし、「にわか動員」で小銃も銃剣も持たない、丸腰の兵隊が十万人もいたと言われます。「無敵關東軍」と言われた面影は、もう全くなくなつていきましたが、そこには、満州の防備手薄が分かるとソ連軍が出て来る。案山子でもいいから、師団と兵隊の頭数だけは多く揃えておきたい。こういう発想があつたようです。ですから大本營が五月二十八日、關東軍に提示した対ソ防衛作戦計画は「静謐保持」。とにかくソ連に対しては静かにして、万一開戦になつた場合は、關東軍総司令部を朝鮮国境に近い通化に移して、最後の拠点とする。満州の四分の三は最初から放棄して、満州南部と朝鮮をあくまで守り、本土決戦を有利にしようというのです。東部国境の虎頭、東寧など地下要塞は、頑強に抵抗してソ連軍の進出を食い止めましたが、ソ連軍主力が進攻して來た広大な西正面は、無防備のまま開放されたようなものでした。ソ連軍は無人の野を行くが如く、満州内部に侵入して來たのです。

スター・リンは、關東軍の弱体化を米軍やソ連の東京大使館からの情報で、百も承知のはずでした。それでいて、これだけの大兵力を国境に集中したのは、アメリカの原爆攻撃が始まると、日本が降伏してしまえば戦争は終わってしまいます。一気に国境を突破して、日本が降伏する前に取れるものは取れるだけ取り、対日戦勝国としての発言力を、少しでも多く確保しておこうとしたのです。日本の方

は、七月二十六日に「ポツダム宣言」が発表されてからも、宣言の署名国にソ連が入っていないことに、一縷の望みを託していました。ソ連に和平の斡旋を依頼するため、天皇の特使として近衛文麿元首相を派遣しようとして、一度は断られていましたが、東郷茂徳外相は八月二日、佐藤尚武ソ連大使に近衛派遣にソ連の理解を求め、ソ連側の回答を督促するよう訓令しています。そして広島の原爆被害の深刻な報告が入ってきて、東郷は一刻も猶予できないと、佐藤の返電も待たずに行七日午後三時四十分、緊急電報でソ連のモロトフ外相との会見を督促したのです。「形勢益々逼迫シゾノ聯側ノ明白ナル態度速力ニ承知致度キニ付急速回答御取付相成様此上トモ御尽力ヲ得度シ」

待ちに待つ佐藤大使の返電は、八日の正午、外務省に届きました。佐藤はスター・リン一行が六日にボツダムから帰国すると、モロトフに会見を申し入れていましたが、「八日午後五時から会見する」と言うのです。それも最初は午後八時と指定してきたのに、すぐ三時間早めてきたのですが、これには重要な意味が隠されていました。スター・リンは、広島への原爆投下を聞いて、ぐずぐずしていっては出番がなくなると、当初十一日に予定していた対日参戦日を一日繰り上げ、ソ連軍最高司令部も七日午後四時三十分、「九日攻撃開始」の極秘命令を出していたのです。モスクワの八日午後五時は、満州では午後十一時になりますから、九日午前零時の開戦一時間前に、形だけは開戦通告をしておこうというわけです。

佐藤大使が定刻にモロトフを訪ね、ロシア語で「今日は」としゃべりかけると、モロトフは手で制止して、「きょうは、重要なコミュニケーションをあなたに通達しなきやならんことがあるから、まあ、ここにお掛け下さい」。こう言つて佐藤を椅子に座らせ、読み上げたのが「ソ連政府ハ明日即チ八月九日ヨリ日本ト戦争状態ニアルモノト思考スルコトヲ宣言ス」。こういう宣戦布告の通告文だつたのです。佐藤は、それまで東郷外相に再三、「ソ連に和平の斡旋を期待するのは誤りだ」と進言してきましたが、「万事休す」と思つたそうです。佐藤は、開戦がモスクワ時間だと思ったのでしょう。「開戦までにまだ数時間あるが、それまでは外交特権があるので、この最後の会見の模様を本国へ打電したい」。するとモロトフは、即座に承諾したばかりか、「マリク大使がいま同時に、日本政府に宣戦布告を伝達している」と言います。

佐藤は大使館に戻つて、すぐ東京に打電しましたが、ソ連は奇襲攻撃が成功するように、佐藤の電報を押さえてしまつたのです。その後も、翌年五月に帰国するまで、毎月一本の電報は許すというので、大使館員や在留邦人の健康状態、生活ぶりを知らせて、家族にも安心させた積もりでした。しかし帰国してみると、電報は一本も書いていません。佐藤は「宣戦布告の電報だけは、東京に取り次がれると信じていたが、それさえ書いていなかつた。ひどい話だ」と憤慨しています。しかも、マリク大使が東郷外相に面会を求めてきたのは、ソ連軍がもう満州

に殺到していた九日の昼です。東郷の方は、ソ連参戦の新事態で最高戦争指導会議、閣議と会議の連続です。「急用なら次官に面会するよう」伝えたところ、「今日はよろしい」ということで、結局、ソ連政府の正式な宣戦布告は十日になつてからでした。

とにかく八日の夜は、東京ではそんなこととは全く知らずに、政府首脳も軍首脳部も、佐藤・モロトフの会見結果を固唾を呑んで待つていたのです。鈴木貫太郎首相はこの日、広島への原爆で「速やかに終戦を」という天皇の意思を伝えられ、内閣書記官長の迫水久常に、九日の最高戦争指導会議と閣議の開催を指示していました。迫水が、九日午前二時頃までかかつて会議の準備を整え、「今頃はもう、佐藤大使はモロトフに会つたろうが、どんな回答が来るか」。そう思いながらまどろんではいた三時頃、同盟通信海外局長の長谷川才次から電話がかかってきたのです。「サンフランシスコ放送によると、どうやらソ連が日本に対して宣戦布告をしたらしい」。迫水は驚いて「ほんとか、ほんとか」と何度も確かめ、「立つている大地が崩れるような気がした。全身の血が逆流するような憤怒を覚えた」と言っています。ソ連がいつ攻めて来るかも知れないとは思いつつも、藁にもすがる思いで対ソ交渉に期待をかけていただけに、ソ連進攻が現実となつた時、その驚愕と動搖は大きかつたのです。

しかし、報告を受けた鈴木首相は、「終戦の決意」を固めていました。迫水に「いよいよ来るのが来ましたね」。静かに語り、車を飛ばして来た東郷外相にも、「この内閣で始末をつけることにしましよう」。こう言つて、「何はともあれ、陛下の恩召しを伺う」と参内したのです。首相官邸に戻つて来た鈴木は、出迎えた迫水らにただ一言、「戦争はやめるよ」と言つたそうです。そして迫水を呼び止め、「いざという時には、陛下にご決定して頂く」。鈴木はこの時すでに、「本土決戦」、「徹底抗戦」を叫ぶ軍部を押さえるには、「聖断しかない」と、とつておきの手段を考えていたのです。

九日午前十一時から最高戦争指導会議、午後二時半からは閣議が開かれ、東郷外相の意見は「ポツダム宣言中に挙げられたる条件中には、天皇の国法上の地位を変更する要求を包含し居らざることの了解の下に、政府はポツダム宣言を受諾す」。こういうもので、海軍大臣の米内光政は賛成しましたが、これに対し皇帝室の地位の絶対保持、武装解除については内地に帰つて実施すること、戦争犯罪人は国内に於て処理すること、保証占領の条項は保留すること。この四条件をつけて反対したのが陸軍大臣の阿南惟幾で、参謀総長梅津美治、軍令部総長豊田副武も同調し、深夜まで紛糾しました。この間、午後四時ごろには長崎への原爆投下が報告され、鈴木首相は御前会議開催を決意します。御前会議には枢密院議長の平沼騏一郎も出席し、平沼は外相意見に賛成しましたから、鈴木がここで「ポツダム宣言」受諾に賛成すれば、四対三で一応は受諾が決まつたはずでした。し

かし鈴木は、その方法を探らずに、十日午前二時過ぎ「聖断」を仰いだのです。天皇は「私は外務大臣の案に同意する」と答えられ、最初の終戦の「聖断」が下つたのですが、そのままでは終わらず、アメリカ側回答をめぐって「国体護持」の一線を守れるかどうかで、激動の日々が続き、十四日正午の再度の「聖断」となるのですが、このことは来月詳しくお話をすることにして、きょうは「ソ連参戦」にしぼつてお話します。

ソ連参戦に、一番大きな衝撃を受けたのは陸軍でした。「ポツダム宣言」が発表されてからでも、陸軍省軍務局は「總理ハ阿南、軍需・食糧・内務は陸軍関係者」。こういう新内閣案を用意し、鈴木内閣が和平の動きを見せれば、いつでも内閣を倒して阿南陸相を首相とする陸軍内閣を作ろうとしていました。参謀本部作戦課も広島に原爆が投下されても、「本土決戦、必勝の信念にいささかの変化なし」と、徹底抗戦の構えを崩していません。ところが、本土決戦計画の「決号作戦」は、ソ連の中立を前提として初めて成り立つものなのです。その頼みの柱が崩れたのですから、陸軍のショックは大きかつたわけです。参謀次長の河辺虎四郎中将は、午前六時に叩き起こされ、ソ連参戦の報告を受けた時のショックを、日誌にこう書いています。「蘇ハ遂ニ起チタリ！予ノ予想ハ外レタリ」

大体が、日本の終戦工作がソ連一本槍になつたのも、河辺が四月二十二日、東郷外相に「対ソ工作を大胆にやつてほしい」と要望したのが始まりでした。参謀本部は、ソ連の中立条約不延長、極東に兵力集中の状況に、「絶対に日ソ戦の発生を回避するため、あらゆる方途を講ずる」。こういう基本方針を決定し、東郷の対ソ交渉に陸軍の支持を確約したのです。東郷がこれに乗つたのは、陸軍も同意しているソ連斡旋の和平工作で、終戦への足場を作りたいと思つたからでした。

参謀本部も勿論、緊迫した状況は的確に掴んでいたのです。七月二十六日、この日は「ポツダム宣言」が発表された日ですが、満ソ国境を視察したロシア課長の白木末成大佐は、こう報告しています。ソ連軍は百五十万の兵力、飛行機五千四百機、戦車三千四百台の極東輸送を完了、牡丹江の綏芬河国境までソ連兵が進出し戦車がうろついている。ソ連軍は冬営準備、冬を越す準備をしていないから、白木は「ソ連の対日参戦は八月十日頃であろう」と断言していました。ここまで分かっていながら、なぜ最後までソ連に頼ろうとしたのでしょうか。参謀本部戦争指導班は「ソ連は対独戦で甚大な犠牲を払つたから、対日戦では熟柿主義。日本の戦力が弱体化するまで待つて、米軍の本土上陸が始まつてから出て来る」。

こういう見解で、陸軍の大勢がこれを支持したのは、本土決戦にはソ連に何としても中立でいてほしいという願望、さらには「名誉ある終戦」を考えて、対ソ交渉に期待をかけていたからなのです。関東軍もソ連参戦は九月以降と判断し、陣地の配備変更を行なつて、総司令官の山田乙三大将は前日の八日から大連に出張中で、全くの奇襲を受け、対応が後手後手になつてしまつたので

す。

実は日本政府は、ソ連には最後まで宣戦布告をしていません。大本営の作戦会議は九日午前八時から開かれましたが、対ソ作戦主任参謀の朝枝繁晴中佐は「関東軍を強いと思わせるのが従来の政策だつたが、ソ連が攻撃して来たからには、こちらの嘘は一遍にバレ、どのくらい保つか、後は時間の問題だ。どうせ負けるなら、後のことを考えるべきだとなつた。日ソ間には中立条約があるので、これを破つたソ連は、後で外交交渉になつた時に不利になる。国際世論でソ連を非難させた方が得策だ」。そう考えて、宣戦布告はしないと決めたと言うのです。

ですから九日午後一時、全軍に下達した「大陸命第一三四七号」、これは大本営陸軍部命令のことですが、ソ連が全面攻撃して来ているというのに、「未タソノ規模大ナラス」。また「速ニ全面的対ソ作戦ノ発動ヲ準備セントス」。攻撃ではなく「攻撃の準備をする」と、何とも煮え切らない命令になつてしましました。今は対ソ戦に深入りしないで、後の外交交渉に含みを持たせた方が良い。関東軍を余りハッスルさせたくない気持ちが見え見えですが、関東軍にはもうそんな力はなかつたのです。

陸相、参謀総長ら陸軍首脳が決定した「ソ連参戦ニ伴フ陸軍ノ措置」も、依然として対ソ交渉に期待をかけるという、全く現実離れなものでした。最初に方針として、「ソ連ノ参戦ニ拘ラス依然戦争ヲ継続シテ大東亜戦争ノ目的完遂ニ邁進ス」。こう謳つていますが、要領としては、一、宣戦布告はしないが、自衛のために交戦する。二、ソ連または中立国を利用し、好機に乘じ終戦に努力する。但し、皇室を中心とする國体の護持と國家の独立を維持することを最小限度とし、当分対ソ交渉を継続する。三、国民の奮起を促す。四、速やかに国内に戒厳を行ふ。阿南陸相の義弟で、陸軍省軍務課内政班長の竹下正彦中佐が起案したもので、「戒厳令布告」と、力づくでもといふ陸軍の強烈な徹底抗戦の意志を示しています。しかし、注目されるのは、陸軍が初めて「國体護持」の下に「戦争終結ニ努力ス」としていることです。ここから陸軍は、終戦そのものには反対しなくなり、「ポツダム宣言」を受諾するかどうかは、國体を護持出来るかどうかの問題に移つていくのです。

陸軍のショックのほどは、大本営発表がソ連進攻から十五時間も経つた午後三時に簡単に触れただけ。午後五時になって、ようやく「日満両軍は自衛の為之を邀へ目下交戦中なり」と、発表したことでも分かります。そして、これを聞いた一般国民の衝撃も大きなものだつたのです。漫談家の徳川夢声が日記に記した俳句、「ソ連参戦はたと止みたる蟬時雨」に、その驚きがよく出ています。歌人の斎藤茂吉は「ソビエット露西亞のくにの行動は、わが國民よ永久に忘れじ」、「けだもののからといへどかくのことけがらはしきを行ふべきや」。歌だつてこんなことはしないだろうと、憤りもあらわに歌っていますが、ソ連軍は部隊

ぐるみで掠奪、暴行をほしいままにし、満州の居留民は守つてくれる関東軍もなく、無法と無秩序の大暴風に呑み込まれていったのです。

関東軍総司令部は、予定通り通化に移転することになりましたが、「軍の家族だけが一等車や寝台車に乗り、植木鉢まで持つて逃げ、居留民はほつたらかしされた」。こんな噂が、たちまち新京市内を駆け巡つたのです。ソ連軍の進撃が急なため、新京の居留民を避難させることになり、関係者を集めて会議を開いたのが十日の朝です。ここでは「輸送順序は民、官、これには満鉄も含みますが、軍の家族の順とし、集合次第輸送する。民、官は至急触れを出し、希望者を集めること。集合場所は新京駅前広場。第一列車は十日午後六時発とする」。こう決まっていたのですが、翌朝、満州国総務庁次長の古海忠之の所へ関東軍の輸送担当参謀が来て、「実は関東軍の軍人家族はすでに疎開させた。急に出発せよと言つても、組織のない所では間に合わない。軍の家族なら、命令すれば一定時間内にすぐ出発できるので、そうした措置をとつた」。そして「満州国官吏の家族を疎開させるから、至急準備してもらいたい」と言うのです。古海は市民が騒いでいることを知つていましたし、「官吏より居留民の疎開が先決だ」。そう思つて「満州国官吏家族の特別扱いはお断わりする」と答え、やつと居留民の引き揚げが始まつたのです。新京駅に順番を待つて座り込む数千人の人の波、雨の中を無蓋貨車にすし詰めの疎開列車。古海は「あの時の光景は、今でもまざまざと目に浮かぶ」と、戦後も長く述懐していました。

その輸送担当参謀は「市民一軒一軒に触れて回るのは大変だつたし、長年住み慣れて財産もあれば愛着もある。関東軍がいるのに、そんなに急に新京まで来れるはずがないという気持ちもあり、集まりが悪かつた。その点、軍は各部隊の副官を集めて指令を出したから、集まりが良かつた。とにかく出せる者から出せとなつて、結果的に軍の家族が一番に行くことになつた」。こんな弁解をしていますが、関東軍は居留民の避難に、どれだけ真剣に努力したのでしょうか。その責任を感じて自殺したのが、大陸鉄道司令官の草場辰巳中将でした。ソ連に抑留されていた草場は、東京裁判の証人として関東軍参謀瀬島龍三中佐と共に東京に護送されて来ましたが、昭和二十一年九月二十日未明、宿舎の丸ノ内の三菱ビル一室で青酸カリ自殺をしたのです。瀬島さんの話では、飛行機から佐渡の島が見えたとき、はらはら涙を流していたと言いますが、手帳には「私の罪は、大陸鉄道司令官だったにもかからわらず、満州の避難民に輸送を確保できなかつたことです。私は死ぬしかありません」と走り書きしてありました。

満州の居留民は約百五十五万人でしたが、中でも悲惨だつたのが開拓団の二十七万人です。そのほとんどは、関東軍が防衛線として線引きした地点より北側にいて、しかも何も知らされていないのですから、最初から置き去りにされたようなものでした。ソ連軍進攻で真っ先に戦場になり、頼るべき関東軍は作戦計画に

従つて退却した後です。満ソ国境が緊迫している時、なぜ国境地帯の開拓団をもつと早く引き揚げさせなかつたのか。古海総務府次長は「どうもそうすることによって、軍の作戦計画が洩れるということが最大の理由だつたようだ」と話しています。古海がハバロフスクに抑留中、東部国境の軍参謀長から聞いた話では、作戦会議で国境開拓団をどうするか、問題になつたんだそうです。ところが、ある参謀が「開拓団の引き揚げをやると、軍の後退作戦が洩れるから、見殺しにするのも致し方ない」と発言し、開拓民はそのまま放置されたと言うのです。

しかし、その結果は六万六千九百八十八人が病死、自決や襲撃による死者一万一千五百二十人と、実に二九%もの大きな犠牲を出すことになったのです。しかもこの満州移民は、言わば国策として送り出された人たちなのです。満州事変に続いて昭和七年三月一日の満州建国で、「五族協和」、「日本、満州、朝鮮、蒙古、漢民族が仲良くやつて行こう」、「王道樂土建設」。このスローガンの下に、まず七年十月三日、拓務省の第一次武装移民段四百二十三人が東京を出発し、ソ連国境に近い吉林省永豊鎮に入植しました。いずれも農村出身の在郷軍人で、日本刀と小銃で武装し、匪賊と万一の対ソ戦に備えながら、満州の広大な原野を切り開いて行こうと言うのです。そして大量移民を促進したのが、昭和十一年の広田弘毅内閣時代に決まった「二十ヶ年百万戸送出計画」でした。関東軍の立てた「満州農業移民百万戸計画」を土台にしたもので、九月十日に第一期五か年計画として約十三万戸、予算一億円を閣議決定しています。昭和十二年九月には日滿両国政府出資による「満州拓殖公社」が設立され、内地には満州開拓移民を送り出すため、府県立の訓練所が五十か所に設置されました。

しかし、新天地開拓の理想に燃えて渡満した素朴な農民たちを待ち受けていたのは、ソ連軍進攻による悲惨な運命だったのです。入植地の多くが、それまで住んでいた現地民をわずか五円の立退料で、追い立てるようにして取り上げた土地です。口では「五族協和」を唱えてはいても、日本人の優越意識が随所に表われましたし、強制的な労務、食糧の供出も反感を買つていました。ソ連軍だけではなく、敗戦と共に手に手に鎌や棍棒を持った現地民が押し寄せて來たのです。開拓団は「根こそぎ動員」で残つているのは老人と女、子供だけ。十六、七歳の少年たちが、日本刀や竹槍で防戦しましたが、多勢に無勢、どうにもなりません。集団自決する光景が、隨所に見られました。

東安省の七つの開拓団は逃避行の途中、ソ連軍戦車に包囲され、千四百六十四人の犠牲者を出しています。信濃毎日新聞社編纂の「平和のかけはし 長野県開拓団の記録と願い」は、高社郷開拓団の集団自決の模様をこう書いています。

「それでは一足おさきに…」子供を両手に、あるいは胸に、火葬場になる馬小屋へと立去る人の数がふえた。二発、三発…。…消えかかる星空に、同胞が同胞を撃つ銃声が鋭い。読経が低く流れるなかを、自決者はつづいた。髪を振り乱し、

目を血ばしらせ、泣き叫ぶ子供を抱きしめて去つて行く母親達。こんなことが、この地球上にあつてよいことなのだろうか。「どうちゃん！ イヤダッ！」流れ出た血にすべりながら逃げまわる子供。何事かわめきながら目をつぶつてヒキガネを引く父親…。撃つものも、撃たれるものも涙を流しながら「惨劇」はつづいた。その数は五一四人…。馬小屋は死体の山となり、高社郷の血は川となつて流れた。

やつとの思いで都市部にたどり着いても、避難列車はなく、避難所で厳しい冬に直面することになります。おぶつた赤ん坊が死んで、ウジがわいているのにも気付かない半狂乱の母親。身ぐるみはがされて、麻袋を体に巻き付けただけの女性。新京の避難所では食糧が不足し、赤痢やチフスが大流行しました。墓地には氷点下三十度の寒さで凍つた丸裸の死体が、数百人分山積みにされて、野犬が食い荒らし放題。昭和二十一年春までの死者は、新京だけでも三万人にのぼりました。そんな中で「手元に置いて餓死させたり、病氣で死なすよりは、生きていてほしい」。こう思うのは、親心でしょう。「せめて子供だけでも…」と、中国人の申し出に応じて預けた人も多かつたのです。戦後も長く続いた「中国残留孤児問題」の原点は、一番危険な国境地帯に開拓民を置き去りにしたことから始まっているのです。

軍隊というものは、まず国家を防衛し、その国民を保護することが最大の任務なのです。かつて日露戦争で、この習志野の騎兵旅団を率いて、当時「世界最強」と言われたコサツク騎兵を破つた秋山好古大将は、「強大なロシアに勝てたのはなぜか」。こう聞かれて、「ロシア陸軍が国民の軍隊でなかつたからだ」と答えています。つまり、ロシア皇帝の軍隊であつて、皇帝の「極東征服」という野心のために動いた軍隊だと言うのです。日本の軍隊は、明治維新で生まれた四民平等の国家と国民を守るために軍隊であつて、「だからこそ、日露戦争という明治国家最大の危機に、みんな銃をとつて戦つたのだ」と、秋山は言っています。

日本陸軍も、昭和の初めまでは「国軍」と言つていたのです。それを「皇軍」と言うようになつたのは、昭和六年の暮れ、皇道派の將軍荒木貞夫が陸軍大臣になつてからでした。そして陸軍の参謀は、「天皇の軍隊」の名のもとに、統帥権を振りかざし、国家も外交もない勝手な行動を繰り返していきます。私は、これが太平洋戦争への道を開いたんだと、思つていますが、同時に「天皇の軍隊」の論理が、何でも軍事優先、作戦の都合優先で、国民の生命を守ることが軍隊最大の使命だということを、忘れさせてしまったのです。

通化に移動していた関東軍総司令部は、「十五日正午から重大な放送がある」との通報で、新京に戻り「終戦」の玉音放送を聞きました。しかし、肝心の大本営命令が来ません。十五日夜遅く発令されたのは、「各軍ハ別ニ命令スル迄現在ノ任務を遂行スヘシ 但シ積極進攻作戦ヲ中止スヘシ」という、何とも不徹底なもので

故人不以爲子也。子之不孝，則無子矣。故曰：「子不孝，無子也。」

諸侯之卿大夫皆有封地，故稱侯伯子男。周禮：天子之卿大夫皆有采邑，故稱卿大夫。

（五）在本屆全國人民代表大會上，我們要進一步加強和改善党的领导，堅持以經濟建設為中心，堅持改革開放政策，堅持社會主義方向，堅持走中國特色的社會主義道路。

（《漢書·藝文志》）

从以上分析可知，本研究的“社会支持”量表具有良好的信效度。

中之大德，無以過此。故其子曰：「吾父之教我，有如驅千萬人，使各以其職事而行其職事者也。」

2

す。クーデター騒ぎなど軍首脳部の混乱ぶりが分かりますが、大本営は翌日の十六日午後四時になつて、ようやく「即時戦闘行動停止」の命令と、「局地停戦交渉及び武器引渡容認」を指示して来ました。関東軍総司令部はこれを受けて同夜、第一線司令部に「停戦命令」を下達しましたが、ソ連軍総司令官ワシレフスキーア元帥は、「天皇の声明は単なるステートメントに過ぎず、日本軍の軍事行動を停止する命令ではない」として、全軍に攻撃継続を命じたのです。

南樺太西海岸の真岡町に、ソ連軍が艦砲射撃と共に上陸して来たのは二十日の早朝でした。船着場で荷役作業中の作業員に機銃掃射を浴びせ、市民に対する無差別攻撃が始まつたのです。真岡を守る部隊長は、停戦交渉のため軍使として村田徳兵中尉ら十三名を派遣したのですが、ソ連軍は白旗を掲げているのに自動小銃を乱射、村田中尉ら十人が死亡しました。真岡郵便局では、十七歳から二十四歳の女性電話交換手九人が青酸カリ自殺をしていました。隣町の泊尾郵便局を呼び出してきたのは、二十二歳の伊藤千枝でした。「ソ連兵が続々と来てます。私たち、みんな倒れてしましました。私もだんだん目が見えなくなつてきました。長い間、お世話になりました。さようなら」。郵便局長は、声の調子におかしな気配を感じて、「死んではいけない。ソ連兵が来たら、窓から白い旗を出すんですよ」。思わず叫びましたが、電話の声は一段と弱々しくなり、「弾がどんどん飛んで来ます。もう、どうにもなりません。さようなら、さようなら」と言つて、電話は切れたのです。彼女たちはソ連が参戦して來た九日、軍から「職場死守」を命じられ、「最後は自決せよ」と青酸カリを渡されていました。確かに通信手段の確保は、軍にとつては大事なことだったでしょう。しかし、彼女たちは非戦闘員であり、どうしても電話交換業務を守りたいのなら、それは軍人かすべきことだつたのです。昭和三十八年の終戦の日、晴れた日には宗谷海峡を隔てて樺太が見える北海道最北端の稚内公園に、「殉職九人の乙女の碑」が建てられました。

四十三年九月、「北海道百年式典」でここを訪ねられた昭和天皇は、双眼鏡で感慨深げに樺太の方をじつと見ておられたそうです。真岡の市民の死者は千人を超えたが、樺太の停戦交渉が成立したのは二十二日でした。ところがソ連軍の攻撃は続き、北海道留萌沖ではこの日、樺太からの避難民を満載した船三隻がソ連の潜水艦に魚雷攻撃され、千七百八人の死者を出したのです。

滿州國最後の重臣会議は、十七日深夜開かれ、皇帝溥儀は自らの退位と滿州國の解散を承認し、滿州國は十三年の短い歴史を閉じました。溥儀は日本への亡命を希望し、十九日奉天飛行場を離陸寸前、空輸により進出して來たソ連軍に捕えられ、チタに連れ去られました。そして、武器を置いた日本軍将兵にも、シベリア抑留という、予想もしていなかつた苛酷な運命が待つていたのです。

×

スター・リンが対日戦を決意したのは、いつたい、いつだつたのでしょうか。太

×

太平洋戦争が始まつて、世界中の主要国が枢軸国、連合国と二つの陣営に分かれています。戦っている中で、日ソ間だけは中立関係を維持するという、奇妙な状態が続いていました。日本は、対米戦遂行にソ連の中立を必要としましたし、ソ連もまた対独戦に全力で立ち向かうには、日本の中立が必要だつたからです。しかし、その中立は、お互いの戦略的利益にかなつてゐる間は守られます。しかし、それが崩れて、その必要がなくなれば、いつでも廃棄される運命にあつたのです。

日ソ中立条約が結ばれたのは、日米開戦の八か月前、昭和十六年四月十三日でした。日ソ両国の相互不可侵。日ソいづれかが第三国と戦争になつた場合、他方は中立を守る。有効期間は五年、期間満了一年前に廃棄通告をしなければ、さらに五年間自動延長する。この三か条ですが、これがいかに脆いものだつたのか。直後の六月二十二日、独ソ戦が勃発した時、日本自身はどう対応したかを考えみれば分かることなのです。参謀本部は対ソ戦の準備にかかり、対ソ戦に踏み切る目安を、極東ソ連軍がドイツ戦線に送られ、半減した時としました。冬のシベリアの制約を考えれば、開戦は九月初め、八月上旬には意思決定をする必要があるとして、七月七日、機密保持のため「関東軍特種演習」、略して「関特演」と名付けた第一次動員に踏み切つたのです。関東軍兵力三十三万を八十三万人に、内地留守部隊も十四万人増員するという大動員です。

しかし、ソ連はドイツの新聞特派員の肩書きで日本に送り込んだスパイ、ゾルゲの情報によつて、こうした動きを的確につかんでいました。極東ソ連軍は西へ移動せず、破竹の勢いを見せていたドイツ軍の進撃も、モスクワ寸前でストップし、柿が熟したら拾う積もりだつた好機は到来しません。しかも、日本軍が南部仏印に進駐したため、アメリカは八月一日、石油など対日全面禁輸に踏み切り、参謀本部も「関特演」どころではなく、八月九日、年内の対ソ武力発動を断念したのです。ですから、開戦一か月後の昭和十七年一月十日、大本営政府連絡会議で採択した「当面ノ施策」では、「日蘇間の静謐を保持スルト共ニ蘇聯ト米英トノ連繫ノ強化ヲ阻止シ為シ得レハ之ヲ離間スルニ努ム」。ただこの時の「静謐」は、緒戦の連戦連勝に沸き立つてゐる時です。機会があれば、いつでも攻撃に転じるといふ意味で、事実、陸軍の目は、対米戦を始めたばかりだといふのに、ソ連に向けられていたのです。五十一個師団のうち、満州には十三個師団残し、南方戦線に向かたのは十一個師団四十万人に過ぎません。しかも、海軍のハワイ真珠湾攻撃、陸軍のマレー半島上陸作戦が成功すると、参謀本部は開戦十日後の十二月八日には、南方作戦が一段落したら南方の兵力を二十万に半減し、「昭和十七年夏ヲ目途トシ関東軍ノ対ソ作戦準備ヲ極力促進スル」。こういう方針を決めていたのですが、主力空母四隻を失つた十七年六月五日のミッドウェー海戦、さらには八月七日の米軍のガダルカナル島上陸が、戦局の決定的なターニング・ポイントになりました。これ以後、日本の政策は一貫して「静謐保持」になり、もはや熟

した柿が落ちるのを待つのは、日本ではなく、ソ連になつていつたのです。

ルーズベルト大統領は、日米開戦の翌日、ソ連の駐米大使リトルヴィノフに対日参戦を要請しています。これに対しモロトフ外相は「いまソ連は、対独戦に全力を集中しなければならず、また日ソ中立条約に拘束されている」。こう回答するよう訓令していますが、これはアメリカから軍需物資の増援を取り付けるなど、ソ連参戦を高く売り付ける意図からだつたようです。直後の十二月十二日、蒋介石が対日共同戦線の樹立を求めてくると、スターリンは「ソヴィエトは日本と戦わねばならない。なぜなら、日本は必ず中立条約を破るであろうから」。こんな書簡を送り、「準備には時間が必要である」と付け加えています。また十八日、モスクワを訪問したイギリスの外相イーデンにも、「ソ連は将来、対日戦に参加するであろう。それには、日本に中立条約を破棄させるようを持つて行くことが得策だ」。こう語っているあたり、スターリンは開戦直後から対日戦を決意していました。

スターリンは昭和十八年五月二十一日、日本海に至る鉄道建設を、ドイツ軍捕虜などの強制労働によつて短期間で完成させるよう命じていますが、これが対日戦に向けて、極東に軍隊、軍需物資を送るための具体的な準備の始まりでした。そして、太平洋戦争での米ソ協力の転換点になつたのか、十八年十月です。スターリンは十八日、モスクワを訪れたアメリカのハル国務長官に、初めて「ドイツを敗北させた後、対日戦に参加する」と、明確に約束したのです。アメリカの対ソ援助が急ピッチで始まり、ベーリング海峡通過の飛行機輸送は毎月二百機を超え、燃料類も月に五十万トンに達しました。十一月二十八日からテヘランで開かれた米英ソ三国首脳会談では、米英が翌年の十九年五月までにフランス海岸に上陸して、ドイツを西から攻めること。スターリンの方は、その見返りにドイツ降伏後の対日参戦を約束したのです。

独ソ戦が始まつてから三年間、マスコミに反日の言論を禁じてきたスターリンでしたが、昭和十九年十月二十日、米軍がフィリピンのレイテ島に上陸して来るところ、この頃からソ連の新聞に反日的な論調が目立つようになりました。そしてスターリンも十一月七日、革命記念日の演説で、この日はゾルゲと元朝日新聞記者尾崎秀実が国際スパイとして処刑された日ですが、初めて日本を「真珠湾を攻撃した侵略国である」と、名指しで非難したのです。もう、ひたすらソ連の中立頼みになつていた日本の衝撃は大きく、十六日の最高戦争指導会議で対応を協議しましたが、結局はソ連を刺激しないため、沈黙を守ることに落ち着きました。席上、参謀次長の秦彦三郎中将、この人は大正十五年から十年間、ソ連、ポーランド、ラトビアなどの駐在武官を務めて、陸軍切つてのソ連通と言われ、二十年四月には関東軍総参謀長として対ソ戦に当たつた人ですが、「ソ連は当然中立条約を廃棄すべく、ソ連としては今日、中立条約存続の理由を認めない。独裁国の指

導者にとつて条約と戦争とは別である。条約があると安心はできない」。極めて的確な意見具申をしていたのですが、結局は藁にもすがる思いが外交判断の目を曇らせ、戦争決意をしているソ連に、和平の仲介を依頼する愚策になつています。

昭和二十年二月四日から、ヤルタで行なわれた米英ソ三国首脳会談では、秘密協定が結ばれました。ソ連の出した大きな政治的要求、南権太返還、千島列島引き渡し、旅順港租借、大連港の優先的な利益。スターリンは、これをルーズベルトに認めさせる代わりに、対日参戦について「ドイツ降伏」、「三か月後」と、期限を切つて約束したのです。スターリンの心配は、ソ連参戦前に日本が降伏してしまうことでした。そこへ日本の方から、日ソ関係の改善を申し入れてきたのは、戦争を引き延ばしたいスターリンにとっては、思う壺だつたでしょう。ソ連大使をしたことのある元首相の広田弘毅が、箱根に疎開していたマリク大使を訪ねて日ソ交渉を申し入れたのが六月三日でした。マリクは、モロトフの指示でのらりくらり、本国政府への報告も電報ではなく、最も遅い方法である外交クーリエ、伝書使を使う有様です。日本に期待を持たせつつ、戦争を長引かせることに利用したのですが、貴重な時間が失われていました。

ソ連共産党政治局は六月二十六日から二日間にわたり、政府と軍参謀本部との合同会議を開いて、対日開戦日を八月二十日から二十五日の間と決定していました。ところがスターインは、七月十六日の夜、ポツダム会談に出席のためポツダムに着くなり、極東軍総司令官ワシレフスキイ元帥に電話を入れ、「満州進攻の日取りを十日間ほど早めよ」と督促したのです。こうして攻撃開始を八月十一日に繰り上げさせたのですが、十七日の会談が始まる前、トルーマン大統領の宿舎を訪ねて対日参戦を表明しています。トルーマンは、日記に書いています。「彼は八月十五日にジャップとの戦争に入るという。そうなれば、ジャップはおしまいだ」。二十四日の米英ソ軍事会談でも、アントノフソ連軍参謀総長は「八月中旬参戦」を言明し、アメリカ統合参謀本部は占領軍最高司令官に予定しているマッカーサー元帥に対し、「八月十五日にはソ連参戦の見込み」、さらに「それ以前に突然日本崩壊の可能性に備えて、占領政策を研究しておくよう」打電します。ソ連が参戦日を十五日と匂わせたあたり、アメリカ側に「参戦はまだ先だ」と、意図的に思わせようとしたのではないでしょうか。

ポツダムでの米ソの思惑を一変させたのが、まさに会談前日の七月十六日、ニューメキシコ州の砂漠で行なわれた原爆実験の成功でした。アメリカにとつて、日本の降伏にソ連の手助けは必要なくなつたし、むしろ迷惑なものになつていきました。トルーマンは「ポツダム宣言」発表の二日前、二十四日には「八月三日頃を目標に原爆投下の準備をするよう」命令を出しているのです。そして当初

は、宣言署名国に入っていたソ連を外してしまいました。これが日本に無用な期待感を持たせることになったわけですが、スターリンだけではなく、トルーマンも急いでいました。原爆でソ連参戦前に日本を降伏させ、万一ソ連が参戦することになつても、駆け込み参戦の価値を大きく引き下げようとしたのです。また原爆の威力を見せ付けければ、戦後の世界政治に主導権を握ることも出来ます。

スターリンには、大きな誤算でした。「ポツダム宣言」に加わることで、中立条約を破つて参戦することに大義名分が欲しかつたのに、その目算が外れたばかりか、アメリカの原爆保有も知りました。八月六日に広島に原爆が投下されると、スターリンは翌日の七日、開戦予定日を二日繰り上げ、「満州時間九日午前零時の攻撃開始」を命令したのです。すでに米ソ冷戦が始まつており、ここから米ソは、日本降伏後をめぐつて、外交、軍事面で熾烈な駆け引きを繰り広げることになります。

スターリンは、まず米英軍や中国軍よりも一日でも早く満州、北朝鮮、樺太、千島、北支、蒙疆を全面占領して、占領の既成事実を作ろうとしました。次に狙つたのが、ドイツとの戦いで荒廃した国土を再建するため、満州の産業施設の徹底的な撤去と搬出です。満州重工業が四億円を投資した鞍山製鉄所の設備は、完成後わずか四か月でソ連に持ち去られました。どの工場設備も大急ぎで解体し、機械類、発電機、ボイラーなど、根こそぎ接收したのです。まさに「火事場泥棒」でした。満州にあつた日銀券、朝鮮銀行券、社債、株券から、ダイヤモンドや二千百キログラムの金塊と、今のお金に換算したら何十兆円にも相当するものを、かつさらつていきました。中立条約を破つての戦争に、他の連合国から「賠償を求める権利がない」と横槍が入るのを見越して、その前にと計画的にやつたのです。

トルーマンにとって、ソ連参戦がいかに苦々しいものだつたのか。記者会見がわずか一分、米国史上最も短い大統領会見だつたことでも分かります。トルーマンは「ソ連が日本に参戦した」。ただ、こう述べただけで、何のコメントもせずに「that's all、以上」と締め括つたのです。トルーマンは、ポツダム会談でヨーロッパの戦後処理について、スターリンからことごとく妨害され、この苦い経験から、日本管理にはソ連を参加させず、マッカーサー元帥を連合国最高司令官にして完全に管理させることを決めていました。しかし、スターリンも黙つて引つ込んでしません。モロトフ外相は八月十一日、アメリカのハリマン大使を呼んで、「連合国最高司令官を複数制にしてもらいたい」。こう要求して米ソ二人制にし、アメリカと同等の発言権を確保しようとしたのです。トルーマンの意向をよく知つているハリマンは、「最高司令官は一人、それもアメリカ人以外には考えられない」とはねつけ、マッカーサーは十四日、連合国最高司令官に任命されたのです。

そのマッカーサーは、十五日に日本が降伏すると、「一般命令第一号」を日本側

に伝達しましたが、トルーマンも同時にその内容をスターリンに提示しました。これは、どの地域の日本軍がどこの国の司令官に降伏するかを規定したもので、言わば戦後の極東の勢力範囲を決める事にもなる、重要な意味を持つものでした。最大のポイントは、ソ連軍司令官に降伏する地域を「満州、樺太、および北緯三十八度以北の朝鮮半島」として、千島が入っていないことです。千島は、マツカーサーに降伏すべき日本本土に含まれていたのです。「ヤルタ密約」では、ソ連参戦と引き替えに、千島が「ソ連に引き渡される」となっていました。しかし、千島の厳密な定義はなく、ポツダムでの米ソ軍事会議でも、千島列島の場合、北端の四島を除いては米軍の軍事行動の範囲として合意しており、アメリカはこれを根拠にしたのです。朝鮮半島については、国務省と陸海軍合同委員会で協議した際、「出来るだけ北で日本軍の降伏を受け入れられるように」ということで、北緯三十八度線が京城を南に置いて大体朝鮮を二分することから、これを境界線にすることにしましたが、朝鮮半島が韓国、北朝鮮と、南北に分断される運命はこの時に決まつたと言えるわけです。

スターリンは、すかさず反撃に出ました。十六日、ワシレフスキイ総司令官に北海道北半分と南千島の占領準備を命令すると共に、トルーマンに「ソ連の占領地域に全ての千島列島の他、釧路と留萌を結ぶ線を境界として、北海道の北側を付け加えるべきだ」。こう修正要求をしたのです。理由として「日本は大正時代のシベリア出兵で極東地域を支配下に収めた。ソ連が日本本土の一部を占領しなければ、ソ連の国民世論は大きな屈辱を感じるであろう」と、説明しています。さらに十七日には、マニラのマツカーサー司令部にソ連代表として派遣しているテレビヤンコ中将に、「北海道占領と共に東京にソ連占領地区を設定するよう、マツカーサーに要求せよ」と訓令しています。東京をベルリンと同じように、米英中ソの四か国で分割占領することも考えていました。

トルーマンの返電は、十八日スターリンに送られました。千島列島全体をソ連軍の降伏地域に含めることには同意しましたが、北海道分割占領の要求には「日本の全ての本土、すなわち北海道、本州、四国、九州における日本軍は、マツカーサー將軍に降伏させることが私の意図であり、すでにそのための措置がとられている」と、きっぱり拒否したのです。さすがのスターリンもあきらめて、二十二日、トルーマンに電報を送つて「北海道占領」の断念を伝えました。そして、北海道上陸作戦に用意した三個師団が、二十八日からの択捉島など北方四島占領作戦に当たることになります。トルーマンの拒否で、日本はドイツや朝鮮、ベトナムのような分裂国家になることは避けられましたが、同時に北方四島がソ連領土とされ、なかなか帰つて来ない運命も、この時決まつたわけです。

スターリンは九月二日、対日参戦について「日露戦争敗北の汚名を灌ぐためだ」と、勝利演説をしました。「日本はロシアの敗北につけてこんで、南樺太を奪い取

り、千島列島に強固な橋頭堡を確保した」。こう非難していますが、日本の千島列島保有は日露戦争とは関係ありません。徳川幕府は安政元年、一八五四年十二月に下田でロシアと和親条約を結び、択捉島を日本領土、それから北をロシア領として千島列島の境界を決定し、樺太については国境を定めず、お互いの既成事実の尊重を確認しています。それが明治新政府になつて、「気候の不順な樺太よりは、北海道開拓にその費用と労力を注ぐべきだ」。こういう声が出て来て、明治八年榎本武揚を特命全権公使としてロシアに派遣し、五月七日に「樺太・千島交換条約」を締結したのです。日本は樺太を放棄して、代わりに得撫島以北の千島列島全部を日本領としましたが、日露戦争で日本が獲得したのは南樺太だけであつて、択捉、国後など北方四島は、最初から日本固有の領土だつたわけです。

スターリンにとって、対日戦の総仕上げが日本軍将兵のシベリア移送でした。ドイツとの戦いで莫大な人的損害を出しておらず、すでに始まつた冷戦でアメリカなど西側の支援が望めない以上、国内再建の労働力を日本軍将兵の強制労働で補う必要があつたのです。スターリンが議長を務める国家防衛委員会が「第九八九八号決定」、日本軍捕虜五十万人のソ連移送命令を出したのは八月二十三日でした。スターリンが北海道占領を断念した翌日ですから、その不満がこんな命令になつたとの見方もありますが、実施要綱は十三項目にのぼり、その詳細さは急にバタバタ決まつたものではなく、早くから計画されていたことを示しています。移送に先立ち千人単位で作業大隊を編成し、バイカル・アムール鉄道建設、沿海州の炭鉱やハバロフスク地方の森林伐採、工場建設など、はるか遠くウラル山脈の西までの移送先、その人数、職種が一覧表になつていて、捕虜に与える夏冬一着ずつの衣服から生活用品に至るまで、具体的に指示しているのです。

関東軍の停戦申し入れにもなかなか応じず、秦彦三郎総参謀長がワシレフスキイ総司令官に会見できたのは八月十九日でした。日本側は、日本軍の名誉尊重、居留民の保護に万全を期してほしいこと、この二点を強く申し入れ、ワシレフスキイも「ダーダー、ダーダー、鷹揚に「よろしい」と受け入れ、二十一日に停戦協定が成立了。将兵の帶刀帶剣を許すこと、満州の要地ではソ連軍進駐まで日本軍が警備を担任し、進駐後は日本軍自ら武装解除する。この間、通信機関、連絡用飛行機、自動車の使用は差し支えない。こういった内容ですが、何一つ守られなかつたのです。ソ連軍は交渉している最中の十九日、新京、奉天、ハルビン、吉林の主要都市に空挺部隊を送り込み、手当たり次第に日本軍を武装解除し、交通、通信を遮断してきました。九月五日には、山田総司令官をはじめ関東軍首脳がハルビン経由でハバロフスクに送られ、関東軍の指揮系統は崩壊したのです。

九月の初めから、千人ずつの作業大隊に編成された日本軍将兵のシベリア移送が、それこそ荷物並みの貨車輸送で始まりました。画家の香月泰男は、その時の辛い体験をもとに、水墨画のような暗い灰色、思い切つて単純化した表現で五十

七点の「シベリア・シリーズ」を完成させ、昭和四十四年に第一回日本芸術大賞を受賞していますが、こう話しています。「奉天で貨車に乗せられた。日本へ帰すといつてはいたが、列車はハルビンから黒竜江を渡つて行く。貨車の扉は脱走しないように針金で外からガツチリ縛つてあつた。小便も窓からするしかないし、狭くて横にもなれない。豚以下の生活だつた」。そして送り込まれた先は、厳しい冬がそこまで迫つているシベリアであり、外蒙のウランバートル、コーカサスから遠くウクライナだつたのです。

お読みになつた方も多いと思いますが、この苛酷な抑留生活を兵士たちの証言から、「ラーゲリからの遺書」に克明に綴つた辺見じゅんさんが先月、七十二歳で急逝されました。残念なことでしたが、収容所はどこも、長さ二十㍍ほどの細長い木造バラックが十数棟。そこに四千人ほどが詰め込まれましたが、高さが三㍍の板塀と有刺鉄線が張り巡らされ、四隅の望楼にはソ連兵が銃を構えて立つています。食事は、煙草の箱くらいのちつちつな黒パンが一切れ。朝夕にスープ、昼には大豆の水煮がそれぞれ空缶に一杯。ソ連が「第九八九八号決定」で、捕虜に支給するとしていた肉と魚百五十㌘、野菜六百㌘の規定は、全く守られませんでした。すきつ腹を抱えたまま、鉱山採掘や材木伐採、道路、鉄道建設など、苛酷なノルマによる肉体労働を強いられたのです。しかも、氷点下三十度にもなる冬のシベリアです。吐く息はたちまち凍つて、髭や眉は真っ白になります。じつをしていると凍傷になるので、休憩中も鼻をもみ、足踏みを続けて、誰言うともなく「シベリアダンス」と呼ぶようになつたそうです。夜はシラミと南京虫の襲来。体中かゆくて、疲れた体を休めることも出来ません。そこへ栄養失調で、見る見る痩せ細り、死ぬ者が続出しました。凍つて硬直化した死体が裸のまま、収容所の小屋に山積みされていたと言います。

「ポツダム宣言」は、第九項で「日本国軍隊ハ完全ニ武装解除セラレタル後各自ノ家庭ニ復帰シ平和的且生産的ノ生活ヲ當ムノ機会ヲ得シメラルヘシ」。こう規定してはいますが、ソ連が日本への宣戦布告で「連合国宣言ニ参加セリ」と謳つてゐる以上、当然この規定に拘束されます。また明治四十年の「ハーグ条約」、「平和克服ノ後ハ、成ルベク速ニ俘虜ヲ本国ニ帰還セシムベシ」にも違反する非人道的行為でした。ソ連では、スターリン独裁体制になつた昭和五年頃から、反体制派を片つ端から捕まえて、囚人を国家建設の労働に使うラーゲリ、強制収容所がソ連全土に広がつていました。独ソ戦が始まつてからは、ドイツ兵捕虜の収容所建設が本格化し、三百五十万人ものドイツ兵捕虜が各地で強制労働させられていたのです。

関東軍は、なぜ、ソ連との休戦協定を馬鹿正直に信じたのでしょうか。関東軍が八月二十九日付で提出した「ワシレフスキイ元帥ニ対スル報告」という文書が残っています。「当然貴軍に於て御計画があることと存じますが」と断つた上で、将

兵や居留民の処置について、こう希望しているのです。「満州に生業を有し家庭を有する者並に希望者は満州に止つて貴軍の經營に協力せしめ其他は逐次内地に帰還せしめられ度ひと存じます。右帰還迄の間に於きましては極力貴軍の經營に協力する如く御使ひ願ひ度ひと存じます」。「貴軍の經營」とは、ソ連軍による満州經營のことですが、このひたすら懇願するといった感じの「満州残留希望」は、二十一日の関東軍参謀部の協議で打ち出されたものでした。

居留民については「成ルヘク大陸ニオケル民族再興ノ素地ヲ残ス他ハ内地ニ還送ス」。武装解除後の軍人は「希望者ハ成ルヘク大陸ニ其他ハ内地ニ帰還セシム。在満ノ在郷軍人及在満徵集現役兵ハ努メテ満州の原職場ニ復帰セシム」。また開拓団は「全員努メテ開拓團ニ帰還開拓ニ従事セシム」。つまり、関東軍の狙いは、満州に蒔いた種を敗戦後の民族再興に生かすため、出来るだけ多くの軍人、居留民、開拓民を満州に残すことだったのです。まさかシベリア送りなんて、予想もしていなかつたにせよ、関東軍が敗戦という厳しい現実に直面してもなお、時代錯誤としか言い様のない幻想にとらわれていたこと、何でも自分に都合のいいように考え、スターリン体制にいかに無知であつたかを物語っています。

とにかく、関東軍の指揮系統が消滅してしまつたため、ソ連軍占領地区では日本本土との連絡が全く途絶してしまいました。満州の日本人がどんなにひどい状況にあるのか、さっぱり分からぬ中で、満州から最初に届いた報告が「高崎密書」と言われるものです。人間の真価は逆境の時にこそ表われると言いますが、偉い人だつたなと思うのは、戦後経企庁長や官通産相を務めた高崎達之助です。当時満州重工業总裁、終戦で在満日本人救済会の会長になつてましたが、奥地から避難民がどんどん新京にやつて来ます。食糧は乏しく、餓死者が出ることが心配されましたし、越冬の準備もしなければなりません。高崎は「日本政府に連絡をつけるのが先決だ」。そう思つて、吉田茂外相と満州重工業相談役の鮎川義介に宛てた密書を持たせて、二組の決死隊を出すことにしたのです。

九月二十二日のことで、密書は全文二千八十一字。「掠奪連日連夜」の惨状を訴え、各地の罹災者は食べるもの、衣服なく、金さえなく、差し当たり金さえあれば食べ物を買うことが出来るから、是非とも二十億円、一人当たり千円の救済金を支給してほしい。また、老幼婦女子五十万人を年内に引き揚げさせるため、必要な船を優先的に大連に配船するよう、連合国側の承認を得てほしい。この二点を半紙四つ折りぐらいの紙に、毛筆で米粒半分ほどの細字で書いたんだそうです。途中で見つかって没収されないように、密書はマッチ棒二本ぐらいのコヨリにして洋服の襟に縫い込みました。満州重工業の社員が二人ずつ二組に分かれ、吉田外相宛ての朝鮮経由組は失敗しましたが、鮎川宛ての密書を持つた大連経由組はオンボロ船を調達して密航に成功、十一月上旬、長崎に辿り着くことが出来たのです。

鮎川はすぐ幣原喜重郎首相に届けましたが、敗戦国日本は外国政府との直接交渉を連合国総司令部から禁止されていましたから、対ソ交渉はもっぱらG H Q頼みです。米ソ冷戦の中では思うように進まず、居留民の引き揚げが始まつたのは、昭和二十一年四月にソ連軍の満州占領が終わつてからでした。米軍と国民政府軍との間に五月、「在満日本人の送還協定」が成立し、二十一年に約百一万人が帰国出来たのです。その後、国共内戦が激化し、二十二年に三万人、二十三年に五千人で、引き揚げは一応終了とされました。しかし、残る五十万人余りの運命には不明な点も多く、その中には中国残留孤児も含まれているわけです。

戦争が終わつた時、戦場や外地に肉親を送つている人たちが、まず知りたいと思つたのはその安否でした。戦後の混乱で情報が乏しい中、N H Kが昭和二十一年一月五日から放送を始めたのが「復員だより」です。復員や引き揚げの予定、入港する港、船の名前を流したのですが、各地の引揚援護局の壁は消息を求める貼り紙で埋まり、港では「誰々を知りませんか」と、上陸して来る人たちに聞き回る姿が見られました。ところが南方からの復員は順調なのに、満州にいるはずの関東軍将兵は、帰つて来るどころか、どこにいるのか消息さえ分からぬのです。

それが「どうも、シベリアに送られているらしい」と分かつたのは、昭和二十一年三月末、A P通信の「日本兵はシベリアへ送致、目的は不明」という報道でした。五月にシベリア鉄道経由で帰国した佐藤尚武ソ連大使も、沿線で働くされている日本兵を目撃し、ようやくソ連抑留将兵の引き揚げ要求が高まつてしましました。九月十一日には、留守家族三千人がソ連大使館前でデモをして、「冬が来る前に夫や子供を帰せ」と訴えました。こうして十一月二十七日、G H Qと対日理事会ソ連代表のテレビヤンコ中将との間に「引き揚げに関する暫定協定」が成立了。待望のソ連地区からの引き揚げが始まつたのです。まず十二月五日、権太・真岡からの第一陣千九百二十七人が「雲仙丸」で函館へ、七日にはシベリアからの第一船「大久丸」が二千五百五十人を乗せて舞鶴に帰つて来ました。

ところが、これも一年余りで中断し、シベリア引き揚げは米ソ冷戦の中で、ソ連の外交カードになつていきます。再開は昭和二十四年六月二十七日でしたが、舞鶴に着いた日本兵の多くが赤旗を振り、口々に「天皇島に敵前上陸だ!」。こう叫んで、代々木の共産党本部に集団入党したものですから、出迎えの家族は戸惑いましたし、日本中がびっくりしたものでした。シベリアでは、「民主運動」の嵐が吹き荒れていたのです。軍隊の階級制度に反発した兵士たちが、民主化を求めて、それまで特権的地位にいた将校を「反動分子」として攻撃したのです。朝から晩まで将校の吊し上げが横行し、昼の休憩の時には車座になつて自己批判を強制します。夜は共産主義の勉強会が開かれ、先頭に立つアクチブ、積極分子には若い将校も入るようになりました。「反動」呼ばわりされた瀬島龍三さんは、参謀本

部参謀時代に反ソ活動をしたということで、軍事法廷で重労働二十五年の判決を受けたしましたが、「ソ連人から言われるのならまだしも、同胞であり、将校だった連中から言われるのは、何とも情けない限りだつた」と言っています。「中佐殿、みんな赤大根ですから我慢して下さい」。こう同情してくれる兵隊もいましたが、「中は真っ白だが、表面だけが赤い大根」という意味で、そうしなければ自分の命が保たないと、一日も早く帰国するための方便だつたのでしよう。

この赤化教育は、もちろんソ連の指導によるものでした。民主化の成績の良い者から優先的に帰国させ、「日本共産化」の先兵にしようとしたのです。収容所では兵士による民主委員会が組織され、リーダーは捕虜向けの「日本新聞」の編集をしていた浅原正基です。東大の社会学科在学中に反軍国主義運動をやつて懲役二年、執行猶予五年の判決を受け、昭和十八年八月に召集されて、関東軍のロシア語教育隊員をしていました。週に三回、十五万部ほど発行される新聞は、「社会主义躍進」を伝える記事で埋まり、捕虜が一番知りたい日本のニュースとなると、貧困、労働争議などの社会不安や、戦犯追及の動きといったものばかり。そのうちに民主委員が食糧の割り当ても決めるようになり、言うことを聞かないと「反動」扱いをされますから、頂点に立つ浅原は「シベリア天皇」とまで言われたんだそうです。

シベリア引き揚げが中止、再開を繰り返す中、ソ連政府は昭和二十五年四月、約四十七万四千人が帰国したところで、「日本人捕虜の送還は、わずかな戦犯容疑者を除き終了した」。こう発表しましたが、実際は関東軍幹部や特務機関員など約二千五百人が、まだシベリアに取り残されていたのです。そこへ二十六年六月二十七日、朝鮮戦争が勃発し、解決はますます遠のきましたが、二十六年九月八日、サンフランシスコで対日講和条約が調印され、日本は敗戦から六年ぶりに国際社会に復帰することになつたのです。しかし、ソ連代表が調印式を欠席し、ソ連の調印拒否によつて、ソ連との間にはなお戦争状態が続くことになります。

流れが変わつて来たのは、昭和二十八年三月五日にスター・リンが亡くなつてからでした。雪解けムードが生まれて來たのです。考えて見ますと、私の四十年間の新聞記者生活は、スター・リンの死と共に始まつたような気がします。読売新聞に入つて社会部で新人研修を受けている時、デスクに命じられて、アメリカから帰国したばかりの女性評論家石垣綾子さんのコメントを取りに行つたのですが、これが私の書いた原稿が新聞に載つた最初でした。そして五月に仙台の支局に赴任した時、初仕事がシベリア抑留中に亡くなつた、ある陸軍中将の留守宅の取材でした。ご家族の気持ちを考えると、重い気分の取材でしたが、お宅へ伺うとお嬢さんが満面の笑顔で出て来て、「いま毎日の『』音が見えて、生存と分かつて、母は大喜び。先祖のお墓に報告に行つていると……す」。ソ連が発表した抑留者の生存・死亡者名簿は、時事通信からカナ文字ファックスで流れて來るのです

三

其後，王氏之子，繼承者，皆以爲不肖，不能成其業。故其後，王氏之族，多散居他處。而惟有王氏之後，居於此地，因名之曰王氏庄。王氏庄，雖非大邑，然其地勢，高敞平緩，土質肥沃，水草豐美，宜於耕種。每至春耕，王氏庄之農夫，皆肩扛耒耜，手執鋤頭，穿行於田間，播種施肥，辛勤耕耘。每至夏秋，稻谷滿畝，麥穗盈尺，一派豐收景象。王氏庄，亦有山林，山中多竹，竹林茂密，遮天蔽日。每至深秋，竹葉蕭蕭，聲如琴瑟，令人神清氣爽。王氏庄，亦有池塘，池水清澈，魚翔浅底。每至夏季，池中荷葉，亭亭玉立，粉紅荷花，綻放其中，嬌豔欲滴。王氏庄，亦有古樹，樹齡數百年，枝繁葉茂，根盤地下。每至冬季，樹葉凋零，但見枯枝裸露，寒風蕭瑟。王氏庄，亦有小路，蜿蜒曲折，通向遠方。每至晴朗，小路兩旁，野花遍地，蝴蝶飛舞，蜜蜂採蜜。王氏庄，亦有老屋，樸實無華，古色古香。每至夜幕，老屋內，燈火通明，溫馨如家。王氏庄，亦有新居，現代風格，寬敞明亮。每至白天，新居外，綠草如茵，繁花似錦，一派欣欣向榮景象。王氏庄，雖非大邑，然其風景，美不勝收。王氏庄，雖非大邑，然其人文，源遠流長。王氏庄，雖非大邑，然其氣氛，淳樸溫馨。王氏庄，雖非大邑，然其生活，簡單樸實。王氏庄，雖非大邑，然其人情，真摯熱誠。王氏庄，雖非大邑，然其風俗，古樸純真。王氏庄，雖非大邑，然其歷史，悠久深厚。王氏庄，雖非大邑，然其文化，博大精深。王氏庄，雖非大邑，然其未來，光明無量。

が、社の間違いかも知れないと思つて本社に連絡すると、間違いなく死亡だと言います。毎日の記者が私と同期入社の一年生なので、呼び出して伝えると、やはり毎日の間違いでした。その記者は、デスクから「間違いの訂正は、間違つたことを伝えた君しかいない」と言われて、泣く泣く死亡を伝えに行つたのだそうですが、「あんなに辛いことはなかつた」と、後々まで話していました。

昭和二十八年十一月の国連総会では、ソ連、中国に抑留され続けている日本、ドイツ、イタリア人捕虜の問題が取り上げられ、「引き揚げ交渉決議」を採択、国連内に「捕虜特別委員会」も設置されました。こうして国際世論が動き出したことで、十二月一日、ソ連で戦犯とされた八百十一人が「興安丸」で舞鶴に帰つて来ましたが、三千五百七十人全員の帰国には、この後まだ三年もかかるのです。三十一年三月に第二次鳩山一郎内閣が成立し、六月一日からロンドンで日ソ国交正常化交渉が始まりました。しかし、長期抑留者の帰国は遅々として進みません。ソ連が抑留者を人質に、千島列島の帰属問題で難航する交渉を、有利に運ぼうとしたからです。ソ連は色丹、齒舞諸島のみの返還を提案、重光葵外相が折衝、國後を含む四島返還を要求して譲らす、交渉は暗礁に乗り上げました。

「帰国近し」の期待を、裏切られ続けてきた抑留者の怒りが爆発したのが、昭和三十年十二月の「ハバロフスク事件」です。収容所ではこの間、かえつて締め付けが強化され、老齢、病弱者まで、極寒の屋外作業に駆り出すようになつていきました。ハバロフスク二十一分所で十九日の朝、民主グループを除く七百六十九人が氷の上に座り込んで作業を拒否、スト闘争を始めたのです。収容所側は懐柔、脅威しなど、あらゆる手段を使つて切り崩そうとしましたが、抑留者の結束は固く、年を越した三十一年三月二日からは、宿舎に力ギをかけてハンガー・ストライキに入りました。ソ連側は十一日早朝、二千人余りの兵力を投入してハンストを停止させ、同時に収容所長以下職員の処罰、抑留者の作業報酬、医療面などの改善を約束したのです。老齢、病弱者の帰国が始まり、瀬島龍三さんが舞鶴に帰つて来たのは八月十九日でした。「祖国という二文字が、この時ほど胸に深く刻み込まれたことはなかつた」と、話しています。

「平和条約は継続交渉とし、平和条約発効時に齒舞、色丹を返還する」。この「日ソ国交回復に関する共同宣言」がモスクワで調印されたのは、昭和三十一年十月十九日でした。これによつて日本の国連加盟の障害は取り除かれ、国連総会は十二月十八日、全会一致で日本の加盟を可決したのです。二十六日には、ソ連から最後の集団帰国者一千二十五人が「興安丸」で帰つて来ましたが、ここまで來るのに何と時間のかかつたことか。日ソ間の平和条約も未だに調印されていませんし、従つて歯舞、色丹は返還されず、押擱、国後の返還要求についてもロシアが「領土問題は解決済み」の態度を取り続けているのは、皆さんご承知の通りです。原爆、ソ連参戦で悲惨な目にあつた人たちにとつては、なぜもつと早く終戦出

来なかつたのか。やり切れない思いでしよう。昭和天皇は、昭和二十一年五月に帰国した佐藤尚武ソ連大使に言われたそうです。「広田・マリク会談で一ヶ月空費したことについては、お前の言う通りだ。しかし、あの時代には、どうしてもそれを経なければ次の手を打てなかつたのだ」。原爆投下もソ連参戦も、そのスケジュールは「ポツダム宣言」発表前から決まっていたのであり、それを防ぐには宣言の即時・無条件受諾以外にはなかつたでしよう。しかしそれでは、軍部の大規模なクーデターが発生し、鈴木内閣は倒れて收拾のつかない混乱になつていたかも知れません。私も、天皇の「聖断」による終戦は、それが出るまでの長い舞台回しがあつて、初めて可能になつたのだと思います。